

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	観光学 研究科	観光学 専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	観光学研究科・観光学専攻・4年	韓 準祐	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	観光学部・教授	葛野 浩昭	印
自然・人文・社会の別	社会	個人・共同の別	個人
研究課題名	日本の地方における地域アイデンティティと観光 一湯布院と針江地区を事例として		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	観光学研究科・観光学専攻・4年	韓 準祐	
研究期間	2011 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、従来の「地域アイデンティティ」を構築し、「観光」を通して「地域活性化」を図るとい言説が生まれ広がる社会的背景を考察し、地方に生きる人々のまちづくり実践から見る実際と前者の幻想を対比させ、その言説を批判的に問い直す実証的研究である。

地方分権化の名のもとで地方財政健全化を求める中央、それに答えようとする地方自治体、地域活性化を担う地域外部という構図が存在し、地域住民の捉える「観光」「地域の活性化」と、中央や地方自治体、地域外部が捉えるそれらとはズレが存在する。由布院と針江の「観光」の文脈を越える住民のまちづくり実践を通じて、開発する側に立つ「持続可能性」を含む地域開発の問題を再考する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[地域アイデンティティ] [湯布院] [針江]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

地域アイデンティティを構築し、観光や地域ブランドを通じて、地域活性化を図るといふ論理は、どのように生まれ広がってきたのか。その背景と地域アイデンティティ、その構築言説を批判的に問い直すことを研究の目的としている。中央や地域外部、あるいは地方自治体が捉える「観光」「地域アイデンティティ」「地域活性化」と地域住民がとらえるそれらとのズレを湯布院と針江におけるフィールドワークを通じた実証的研究が本研究の特徴である。

地域アイデンティティは、日本国内外を問わず、地域開発には必要であるという共通の認識が存在するが、一方で日本における地域アイデンティティは、とりわけ地域外部が肯定的に評価する地域イメージや地域色などに限られる傾向にある。その背景には、日本の国・地方の財政の問題が存在する。国・地方の財政の悪化が進行するなか、地方分権化という名のもと地方に求められるのは、財政的・経済的自立であった。そのなかで、地方自治体に取り組んだのが、地域アイデンティティ構築であった。地域アイデンティティという集合的アイデンティティを構築するのではなく、実質的には地域の外部が肯定的に評価し、地域内部もそれに合わせた形で肯定する地域のイメージを、地域内部・外部に表象していくことを意味している。そのなかで観光の経済的・産業的側面がもつぱら重要視される。地域アイデンティティ構築と地域ブランド、地域活性化に関して、小泉内閣が与えた影響は大きい。バブル経済が崩壊した後も、景気対策として進められてきたインフラ整備・ハコモづくりから、小泉内閣は、地域特有の文化、環境、自然等を活かして地域活性化を図るといふ大きな転換を促したのである。そのなかで、地域アイデンティティになる核を見つけ出し、それを地域内部・外部に表象する役割を、地域内部、地方自治体、地域住民ではなく、地域外部のマーケティング、コンサルティング、観光業者が担ってきたのである。

地方自治体によるコーポレートアイデンティティ(CI)を含む、地域アイデンティティ、その構築と、地域住民が実際抱く地域に対するアイデンティティとは大きなズレがあり、そのズレを明確に示していくことに最初焦点を当てるようにしたが、そのズレから見えてくるものは、さらに大きなテーマである中央と地方、地域開発の問題であった。それらの中央と地方、地域開発という課題は、単に昨今観光の場で見られるものではない。戦後日本の中央が進めてきた国土開発計画や様々な地域開発政策において、地方に生きる人々の生活という面は度外視され、地域外部による地域外部のための開発が続けられてきた。テクノポリス法やリゾート法は、その典型的な事例であろう。また、地方自治体も地方財政健全化を中央から促され、地域活性化を最大の課題と挙げながら、地域開発を進めてきたが、そこで生活する住民の立場や意見がどれほど反映され、またそれに向き合ってきたかは疑問である。2011年12月に開かれた「水資源地域活性化フォーラム」での質疑応答で、参加した様々な地域から集まった地域住民と講師、さらには政府の担当者のやりとりからも、中央と地方の問題、地域開発や地域活性化に対する前提に大きなズレが存在することを再度確認することができた。

本研究で捉えている二つの地域、大分県由布市湯布院町と滋賀県高島市新旭町針江地区の地域住民の実践から見えてくるものは、中央や地域外部が目指す「地域活性化」とは距離を置くものであった。それは「観光」に関しても言える。まず、湯布院の場合、地域住民が主体となって1970年代から本格的に進められた地域づくりは、現在の地域アイデンティティの構築、観光の場を通じて表象、地域ブランド創出、地域活性化といった論理とはかけ離れたものであったことを確認することができる。1970年代は急激に進められた都市化と工業化の歪みが表に出始めた時期でもあったが、戦争の影響もあって開発が比較的遅れた湯布院において、開発言説は強く影響していた時期でもある。そのなか、新たな湯布院像を描くことは、様々な局面において困難を極めたと言える。様々な力関係の存在もあって、可能な限り自然や風景を保存しながら、観光と関わることを目指すには乗り越えなくてはならない多くのハードルがあったのである。しかし、それらは、多くの議論の場を設定したことや1970年代にすでに官民共同のヨーロッパ視察を行い、これからの方向性を決めていったことからわかるように、他の地域ではあまり例を見ない先進的な取り組みと展開であったと捉えられる。しかし、「生活型観光地」といふ方向性を決定づけるもう一つの大きな力があったことも確認できた。地域の歴史を再構成し、別府との差異を図ることを支える言説、すなわち開発言説に対抗する言説を作り上げたのである。まちづくりリーダーによる発言、書籍、地元新聞(大分新聞)でのゆふいん物語の掲載(1989年から)による、ゆふいんが目指すべき方向性、その選択を支える言説であった。その言説は、エドモンド・リーチ(1981=2001)が『文化とコミュニケーション』で取り上げたオーストラリア原住民のトーテミズムの例と類似する部分がある。つまり、その例に沿って考えてみると、

研究成果の概要 つづき

- 1)湯布院と別府は異なる地域である。
- 2)湯布院は周辺部としての歴史を持っており、今でもその関係性は続いている。
- 3)中央は開発を促す。
- 4)別府は代表的な大衆観光地であり、大規模の開発が進められてきた。
- 5)別府と湯布院の関係性は、中央と周辺と類似する(奥別府、別府の奥座敷)。
- 6)湯布院は、別府のように開発を前提として大衆観光地になるべきではない。

その結果として、筆者が博士課程前期課程に行った湯布院の地域住民の生業意識の分析で明らかになった、農業に対する意識の高さが証明できる。つまり、湯布院の地域住民は大衆観光地である別府との差異を凶るなか、別府と湯布院の差異を「農業」と捉え、それに対する高い意識を持つことによって、我々は別府とは異なる方向性の地域像を描くということにつながる。逆に生態人類学のマイナーサブシステム論を採用し捉えた湯布院の地域住民の生業意識とアイデンティティは、当然な結果でもあるわけである。

針江の観光の実践からは、従来の「観光」や中央が促す、地方自治体が行う「地域活性化」のためのものとは距離をおく。針江地区内に張られている「観光地ではありません」というメッセージからも、その差を感じとれるが、それでも新たな形としての「観光」を実践し続けている。それは、単なる収入を得るためではなく、地域の薄くなっていくつながりの再構築やまた、地域外部とのつながりの構築をすることが、彼らにとって重要な意味合いをもつ。そのなかで見られるのは、川端という地域アイデンティティの核を見つけ出し、地域活性化のために活用すべきという今の地域アイデンティティ、地域活性化の言説とはかけ離れたもので、川端は、地域内部と外部、さらに地域内部のつながりを再構成する「媒介」として機能することも確認できた。

両事例分析を通じて、「地域アイデンティティ」「観光」「地域活性化」に対する中央や地方自治体、地域活性化を担う外部と地域住民とのズレを考察するとともに、そのなかで、地域住民は、「観光」の文脈を超えたまちづくりの実践を行っていることを再度確認できた。地域活性化、地方財政健全化のために必要とされ、推進される観光と地域住民の実践とは距離の離れたものである。それは、その実践を行う時代における、あるいは地域が抱える様々な異なる問題、しかしある一方では時代・地域の差異を超えて地方が抱える問題への解決に向けての努力であり、そのための実践であることを考えるべきである。地域住民の立場や意見、参加が必要であると言いつつも、何のため、どういった目標に向かっての地域づくりかという前提の根本的ズレが存在する限り、戦後日本が抱えてきた中央と地方の問題や、地方に生きる人々の実践と期待とを読み取ることは困難であると思われる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

韓準祐、自己表象と創発的内省性に基づく地域アイデンティティの考察 — 由布院を事例として、東北亜観光研究(韓国)、8(1)、2012/3/1、241-265